

レジュメ表現から口頭表現への 置き換えの必要性

—日本語学習者による学術的発表のために

居關友里子

◆要旨

発表経験の浅い日本語学習者による学術的発表では、レジュメの表現をその場で積極的にやわらかい表現へ変更する工夫を行っているにもかかわらず、それが文体的に適切な効果に結びついていない例が見られる。ここに学術的場面でのレジュメ発表に適切な文体に関する知識が有用であると考え、その一端として口頭表現での接続表現と副詞の出現数についてコーパスを用い調査した。その結果、論文内で使用頻度の高い表現の多くは、口頭表現にも一定数出現しており、学習者はレジュメでの表現を口頭発表でそのまま使用しても問題とならないことが示唆される。レジュメは口頭発表を学び始めた段階の学習者にとって、発表で活用が可能な一つの資源であると捉えることができる。

◆キーワード

口頭表現、文体、レジュメ、研究発表

◆ABSTRACT

We observe different ways in which learners of Japanese language who have little experience in making presentations, change the expressions used in their handouts to other expressions during oral academic presentations. However, the changes may at times be too informal and therefore inappropriate for a formal occasion such as academic presentations. In this study, I carried out a corpus survey of conjunctive particles and adverbs used in spoken language in order to explore an appropriate linguistic register for academic presentations. The results show that many of the high frequency expressions used in academic papers regularly occur in oral expressions and that the difference between written and spoken Japanese is not that great in the case of academic usage. The expressions used in handouts may be seen as a resource that could be utilized in presentations by learners of Japanese.

◆KEY WORDS

spoken expressions, linguistic register, handouts, academic presentations

On the Need for Altering
the Written Expressions of
Handouts to Spoken Expressions
For Academic Presentations
by learners of Japanese Language

YURIKO ISEKI

1 はじめに

レジュメ^[註1]という配布資料を用いた口頭発表（以下「レジュメ発表」とする）は、学術的場面やその他の場面において広く用いられる、最も一般的な発表形態の一つである。これは日本語母語話者だけでなく、日本語学習者、特に日本で研究活動を行う学習者なども、多く遭遇する発表形式であると予想される。

口頭発表は個人差こそあれ、それ自体が精神的負担を伴うものであり、発表言語に不安がある場合はなおさらこの負担は大きくなると予想される。このような状況で、特にレジュメ発表の経験をこれから積んでいく初期段階の学習者の負担を軽減する方法はないだろうか。今ある言語資源を活用し発表を行おうとしたとき、参照できる知識にはどのようなものがあるだろうか。本研究では発表時点で既にある言語資源の一つとしてレジュメに着目し、これがレジュメ発表における口頭表現としてどの程度使用できるかについて考察する。

2 研究の背景

2.1 先行研究

スピーチを含めた口頭発表、またレジュメの作成は、日本語クラスにおいてしばしば取り扱われる指導項目であり、様々な研究や実践報告がなされている。

本研究では、この二者で用いられる表現間の問題について取り扱う。話しことばと書きことばの対立、また場面に応じた言葉の使い分けは、日本語教育において重要な指導項目の一つとして注意が向けられている。しかし使い分けの線引きや許容範囲は必ずしも明確でなく、個人差もあり、また細かな使い分けは個々の表現それぞれに対して調整を加える必要があることから、体系的な指導の難しい項目であるといえる。このような中、論説文の文体について扱った井上（2009）は、「初級から中級の留学生が論説文で用いる語については、文体の細かな段階差よりも論説文に用いることが適切か否かの境界の明確化の方が喫緊の問題」とし、文体の硬さの順に並べた語に、具体的な使用の境界

を示す試みを行っている。このような試みは学習者の具体的な需要に沿った有用なものであると考えられる。

文章を口頭表現に直す際の文体の変化に関してはどうだろうか。野元（1983）は書きことば原稿を音声にして伝達する際の「読みことば」の存在を指摘し、研究発表を考えると、英語などは研究内容が印刷されたものと口頭発表の表現との間に差がないのに対し、日本語の場合は口頭発表の方がもう少し話しことば寄りであるとしている。この話しことば寄りというものを、学習者はどのように認識し、どの程度新たな表現を学習しなければならないのだろうか。

2.2 本研究の目的

まず表1を見ていただきたい。実際の研究発表場面で用いられたレジュメの表現および対応する部分の口頭表現を書き起こしたものである^[註2]。

表1 話しことば的表現の使用例

例1	[レジュメ] 翻訳問題について、「A」「B」の両方が使える文を、29名中、10名が「A」のみを用いて解答している（一方で両形式を選択したのは1名、Bのみを選択したのは2名）。 [口頭表現] 翻訳問題なんですけど、ABどちらでも使える文なんですけど、29人の中で10人もAのみ使って翻訳しました。一方AもBも使って翻訳したのは1人だけです。で、Bだけを使って翻訳したのが2人です。
例2	[レジュメ] 助詞・時制・可能形の違い、また文として翻訳できていない被験者が多く見られた。 [口頭表現] 助詞とか、あのなんか時制とか可能形とか、できない人がいっぱいいます。

発表は全体を通してレジュメの内容に沿って行われていたが、その細部に注目すると、レジュメの文章を口頭で表現する際、元の表現を変更している様子が観察される。一貫して丁寧体を用いるだけでなく、文の内部でも話しことば寄りの表現へ細かに変更を加えていることから、学習者は丁寧体と普通体の対立に加え、表現の硬さ・やわらかさという対立にも意識を向け、自身の口頭表現を組み立て直していると考えられる。このような積極的な置き換えの背景には、口頭発表に関する手引書にも見られる「原稿を読み上げずに話し言葉で話す」（齊山・沖田1996）といった記述のような、発表は聞き手を意識し、その場

で相互行為的に行うべきである、という規範に対する意識がうかがえる。

しかし学習者の使い分けへの意識が、必ずしも発表に効果的な口頭表現に結びついているとは限らない。表1で行われている表現の置き換えは、書きことばの硬さが口頭表現でもそれほど問題にならない部分（下線部）で行われていたり、むしろ研究発表としては若干やわらかすぎる表現になってしまっている（波線部）ものがありそうである。ここから口頭発表には表現の細かな調整の余地があると予想されるが、調整は一朝一夕に習得できるものではなく、母語話者間でも各表現の使用に対する規範に揺れがある。しかし最低限発表で不自然でない程度に、レジュメの表現を口頭表現に直す必要はあるだろう。この置き換えなければ不自然となる最低限の範囲というのはどのくらいのものなのだろうか。

国立国語研究所（1955）による談話語と書きことばの使用に関する調査では、接続詞および副詞それぞれについての報告があり、場面間の比較では同等の意味を表す語の出現形式や出現頻度の差、また一方でのみ用いやすい形式の存在が見られる。そこで本研究はひとまずの足掛かりとして、文体差が予想される一つである接続表現および副詞を扱い、研究発表での言語使用に関する資料をもとに、小規模の調査を行う。得られた結果を参考に、最低限の置き換えの必要性について考察する。なお実際の文体差はその他の品詞や、また文型などにも表れていると予想され、これらについては今後調査していきたい。

3 研究の手続き

置き換えの必要性について、本研究はコーパスにおける出現数を参考に考察を加える。用いたコーパスと性質は以下の通りである。レジュメでの表現に相当するものとして、大学紀要である『一橋論叢』（以下「論文コーパス」とする）1年分、94本の論文を扱う^[註3]。対する口頭発表での表現に相当するものとして、全国共通語でなされた独話音声をもとに構築された『日本語話し言葉コーパス』（Corpus of Spontaneous Japanese, 以下「CSJ」とする）のコアに収録された177講演、約44時間分を対象とする^[註4]。ここで扱われている分野や内容は論文コーパスと一対一に対応するものではないが、自発的な独話音声をもとにした大規模コ

ーパスであり、学術的発表の資料を含むという特徴が、現在ある資料の中で最も本研究に適していると判断した^[註5]。

まず論文コーパスにおいて出現数が上位であった30語を抽出する。接続表現については、石黒ほか（2009）による接続表現のジャンル別出現頻度調査の結果を使用した。副詞は益岡・田窪（1992）が例として挙げている188語^[註6]について論文コーパスでの出現数を計数し、上位のものを抽出した。これらの語のCSJでの出現数を同様に計数し、得られた結果を参考に、表現の置き換えの必要性について考察し、また置き換えが必要な語はその候補を試案として提示する。

4 レジュメ発表の表現

4.1 接続表現

まず接続表現の出現数について以下の表2に示す（括弧内は学会講演における出現数を表す）^[註7]。

表2 接続表現の出現数

	接続表現	論文	CSJ		接続表現	論文	CSJ
1	しかし	700	64 (39)	16	しかしながら	85	4 (4)
2	また	488	251 (179)	17	つぎに	81	138 (119)
3	そして	305	188 (122)	18	他方	81	0 (0)
4	さらに	233	65 (59)	19	とくに	68	75 (40)
5	たとえば	204	167 (126)	20	ここで	63	71 (61)
6	つまり	195	70 (61)	21	なぜなら	58	0 (0)
7	すなわち	194	18 (16)	22	ゆえに	58	0 (0)
8	したがって	189	7 (5)	23	では	57	70 (54)
9	まず	155	307 (229)	24	最後に	52	63 (46)
10	そこで	113	70 (55)	25	ところで	48	1 (1)
11	一方	112	45 (45)	26	その結果	47	14 (14)
12	だが	106	0 (0)	27	さて	47	13 (7)
13	このように	96	56 (55)	28	こうして	46	5 (2)
14	ただし	94	36 (28)	29	そのため	43	8 (6)
15	なお	90	14 (14)	30	それにたいして	43	25 (22)

（「接続表現」および「論文」列の情報、石黒ほか（2009:80）より転用した。）

網掛けを施したものは、論文で頻繁に用いられているが、口頭表現では使用が見られない表現である。レジюме内で用いられたこれらの語を口頭表現にする際の、置き換えの候補およびCSJ内での使用数は表3に示す。

表3 接続表現の置き換え候補

レジюмеでの表現	口頭発表での表現候補
だが	ですが 13 (12)、しかし 64 (39)
他方	一方 45 (45)
なぜなら	なぜかという 4 (0)、なぜかといいますと 2 (2)
ゆえに	したがって 7 (5)、したがって 6 (6)、そのため 8 (6)、だから 106 (24)、ですから 86 (36)、よって 7 (4)

下線を施したのは表2で既に取り上げた表現であり、「なぜなら」以外の表現はその他の使用頻度が高い接続表現によって代替が可能である。CSJで使用の見られなかった「だが」は丁寧体と普通体の対立により、使用が「ですが」に流れている可能性が考えられるが^[注8]、「なぜなら」などは若干口頭表現として硬めの印象はあるものの、置き換えの候補と比較しても違和感を覚えるほどではないように思われる。このような表現の口頭での使用、また不使用は、表現の微細な印象の差に反応したものであり、発表に熟達した段階で調整を加えることで対応すべき問題であると考えられる。

4.2 副詞

続いて副詞の出現数について表4に示す。

ここでも論文上で多く用いられる表現のほとんどは、口頭でも一定数の使用が確認されるため、あえて別の表現に置き換える必要はなさそうである。ただ一方で、非常に出現数が少ない表現（「しばしば」「もはや」「ふたたび」など）が存在するのも事実である。これらの表現は日常で使用するには確かに硬い印象があるが、研究発表の口頭表現として使用することが不自然であるとまでは言い難い。これは実際の使用が見られることと、使用に関する許容意識の間に差があることを意味すると考えられる。書きことば原稿が、口頭では話しことば寄

表4 副詞の出現数

	副詞	論文	CSJ		副詞	論文	CSJ
1	さらに	553	128 (114)	16	もし	82	61 (29)
2	たとえば	418	289 (217)	17	かなり	78	255 (100)
3	まず	280	436 (294)	18	ほぼ	71	51 (49)
4	最も	251	51 (47)	19	よく	71	258 (47)
5	とくに	249	172 (86)	20	はじめて	69	70 (9)
6	すでに	217	33 (19)	21	いわば	68	6 (6)
7	より	215	56 (53)	22	あまり	65	129 (49)
8	ほとんど	159	118 (42)	23	少し	63	146 (82)
9	まったく	113	90 (37)	24	つねに	62	19 (9)
10	非常に	112	440 (118)	25	しばしば	62	1 (0)
11	必ずしも	104	18 (15)	26	実は	57	96 (51)
12	まだ	96	115 (39)	27	やはり	52	263 (77)
13	決して	92	11 (2)	28	もはや	50	2 (1)
14	もちろん	90	109 (43)	29	当然	49	39 (14)
15	単に	82	8 (5)	30	再び	49	2 (0)

(情報は本研究の調査による。)

りになるという野元 (1983) の指摘と、本研究の論文内の表現はそのまま使えるものが多いという結果の間にある齟齬も、この実際の使用と許容意識の差によるものである可能性が一つに考えられる。つまり野元は「より自然」である口頭表現、対する本研究は「不自然ではない」口頭表現に焦点を当てていることによる差ではないだろうか。

以上第4節で見てきた調査結果からは、論文内の接続表現および副詞のみについていえば、多くの表現は話しことば寄りにあえて置き換えることをせずとも、そのまま使用しても問題にはならないことが示唆される。またCSJ内での使用が見られず置き換えることが適当な表現も、使用数が上位であるその他の語で代替すれば、新たな表現を極端に増やさずとも研究発表に適切な文体での発表を行うことは可能であると考えられる。

5 おわりに——聞き手を意識した発表とは

以上では学術的なレジュメ発表場面で用いられ得る口頭表現について考察してきた。コーパスでの調査結果から、今回扱った表現の限りでいえば、ほとんどのレジュメでの表現が、そのまま口頭表現としても使用することができることが示唆される。学術的場面に口頭で用いられることばは、学術的な書きことばとの乖離が不自然さをもたらすほど大きくはない可能性が考えられる。口頭での使用が見られない表現も一部あったが、文体的に使用が不自然であると明確に線引きできるようなものではなかった。またこれらの表現は、論文での使用が上位であるその他の語に置き換えられるものが多く、レジュメ発表のための新たな表現を極端に増やす必要はほとんどないといえる。

良い発表とはどのようなものだろうか。日本語母語話者、学習者を問わず、個人それぞれに異なる理想や信念があるだろう。本研究が念頭に置いてきたのはこれとは若干異なり、発表を学ぶ初期段階、そもそも他者の発表を聞く機会も少ない段階で、誤解されない、損しない発表を行うことである。およそ共有されている不自然ではない発表、この基盤を知った上で、自身に適した理想的な発表のスタイルを獲得していくのは、学習者の負担という面を考慮しても不経済なことではないはずである。

発表において聞き手を意識することが重要であるのは間違いないが、その方法が必ずしも原稿を見ないこと、その場で聞き手に向けて表現を再構成することとは限らない。聞き手を意識した発表とは万人に一樣のものではなく、発表者が使うことのできる資源に応じて異なるものであろう。この資源の一つ、日本語の表現や、使える韻律の操作などをこれから増やしていく段階の学習者が発表を行う必要があるときに、既に用意してある言語資源「レジュメ」が活用できることを一つの知識として持っているのではないだろうか。レジュメを活用することの利点は、発表言語の能力にある不安、発表に伴う精神的負担の軽減など発表者側のみにあるのではない。聞き手が手元のレジュメに沿って発表を聞いているという、発表自体の特徴にも適っている。発表者の能力に応じて、レジュメの表現を生かし素直に口頭表現化することも、聞き手を意識し

た発表の一つの形であると考えることができるのではないだろうか。

〈筑波大学大学院生〉

注

- [注1] ……本研究が扱う「レジュメ」については、「発表の場面で聞き手に配布する、発表全体の流れが文字化された紙資料」と簡単に定義しておきたい。説明部分を箇条書きでまとめるか否かについては問わない。
- [注2] ……発表者は日本語での日常会話や研究に関する意思疎通はほぼ不自由なく行うことができ、一方で日本語での研究発表は数回経験したのみという段階にある。
- [注3] ……『一橋論叢』は日本評論社刊、号単位で商学部、経済学部、法学部、社会学部、言語社会研究科、人文・自然科学部に執筆されたものである。2004年4月号-2005年3月号の12か月分、目次や学位授与者の情報など論文以外の箇所を除外した、全ての収録論文(94本)を対象とした。雑誌および巻号は、石黒ほか(2009)の接続表現に関する成果を比較対象として使用するに際し、副詞についても同じ性質の論文から抽出するのが適当であると判断し選択した。
コーパスの構築は筆者が以下の手順で行った。基となる論文は、一橋大学機関リポジトリ「HERMES」(<http://hermes-ir.libhit-u.ac.jp/rs/handle/10086/30>)からダウンロードしたPDFファイルである。これらのファイルにはOCRが既に施してあり、概ね正確に文字認識がなされていることが確認できた(一方で誤認識と思われる箇所も一定数見られた。これらは検索後の段階で排除しているため、本論文で提示した出現数は実際の出現数より少ない可能性があることを記しておきたい)ため、この文字情報をテキストデータに転写し使用した。
- [注4] ……国立国語研究所・情報通信研究機構・東京工業大学によって構築された。このうち学会講演(理工学、人文、社会の三領域)70講演、および模擬講演(日常的話題についての講演)107講演の資料を用いる。使用される表現は基本的に学会講演の方が模擬講演よりも硬いものとなっている。レジュメを用いた研究発表は扱われるテーマなど場面の特徴からも学会講演により近いものであるが、今回は硬め(レジュメ内)の表現がどこまで口頭表現で(そのまま)使用できるのか、より使用しにくい状況と考えられる模擬講演も検索対象に含めることとした。
- [注5] ……内容の対応する発表レジュメと口頭表現を扱ったコーパスについては、現在実際の研究発表場面での資料収集を通して作成中である。
- [注6] ……同形式の副詞が複数の用法にわたり取り上げられている場合、他の語への置

き換えが同様に可能か否かを参考に、用法が類似のものは一形式として扱った。

[注7] …… 石黒ほか（2009）の調査では検索の便宜上、計数の対象を文頭に限定している。本研究のCSJを用いた調査でも同様に、節単位の先頭部分に出現したものを計数対象としたが、この直前に言いよどみや接続表現（「で」など）が発話されている場合も計数に含めることとした。

[注8] …… 渋谷（1997）は、研究発表の口頭表現における従属節末の丁寧体の使用について考察し、日本語母語話者はガ・ケレドモ・カラ・シで繋がる節でカテゴリカルに丁寧体を用いられていることを指摘している。今後検証の必要があるが、この規範意識は接続表現についても同様に働いている可能性が考えられる。

参考文献

- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥子・中村紗弥子・劉洋（2009）「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12, pp.73-85. 一橋大学
- 井上次夫（2009）「論説文における語の文体の適切性について」『日本語教育』141, pp.57-67. 日本語教育学会
- 国立国語研究所（1955）『(国立国語研究所報告8) 談話語の実態』秀英出版
- 齊山弥生・沖田弓子（1996）『研究発表の方法—留学生と日本人学生のためのレポート作成・口頭発表の準備の手引き』凡人社
- 渋谷勝己（1997）「日本語学習者のスタイル切り替え—従属節の丁寧表現をめぐる」『無差』4, pp.1-20. 京都外国語大学日本語学科研究会
- 野元菊雄（1983）「日本語の話しことばと書きことば」文化庁（編）『日本語の特色』pp.61-96. 凡人社
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法—改訂版』くろしお出版